

# ジッドに対するスタンダールの「影響」

立川 信子

本を読まなくなったとか、出版の不況と言われて久しいが、本のサロンという見本市のようなものが、パリの広い会場で1981年から年一度春に3日間開催される。サロンの中では作家のサイン会、講演、まとめ買いの割引などもある。2015年はブラジルをテーマにしている。中国や韓国のブースも開設された。書店は減ったとはいえフランスには店舗も数多くあり、ネットで公開されている書物もあり、ネットで購入や購読できるものも少なくない。それにもかかわらず入場料12ユーロ（約1,700円）でも、大盛況で、かなりの人が多量に買い込んでいる。そこで展示されている書籍は、学校で習うような文学書もあるが、それ以外の本も多い。旅行書、実用書、人文、社会、自然科学の解説書、大衆小説というようなもの、児童書、マンガなどあらゆる種類の本で、普段書店では見かけないものも多い。今なお紙媒体の出版文化の愛好者が多いことをうかがわせる。フランスは文学が長い間教養の基礎であった文化ではあるが、書籍の嗜好内容は変化しているかもしれない。

インターネットや映画などのメディアによって、文学の様相も変化した現在でも半世紀前に亡くなったアンドレ・ジッド（1869-1951）に関わりのある出版物をフランスでは見かけることができる。ジッドが創立当初から関係のあったガリマール社が健在であるせいか、最近文庫で出されたマルローのエッセイ集『もろい人間』にもジッドに関する言及は頻繁にある<sup>1)</sup>。カミュも言うようにジッドは文学、とくに虚構の散文作品が世界に大きな役割を果たして

いた時代の文学の概念を代表している作家の一人であるからだろう<sup>2)</sup>。小説が社会と個人を描くものであるという概念を形成されて一般に多量に普及していくのは19世紀であると言えるが、そういう小説の全盛時代を告げる作家、スタンダール（1783-1842、本名 Henry Beyle）は、18世紀の哲学的な要素と、生前にはその小説を十分には理解されなかったという不遇の天才と、波乱万丈の筋の小説という19世紀ロマン主義的な要素を合わせ持っている<sup>3)</sup>。『ラシーヌとシエクスピア』というロマン主義を称揚した評論は文学論争のパンフレットとしてよく知られている。従来の意味の文学全盛時代を生きたジッドに対するスタンダールの影響を考えてみよう。それによって文学が理解されるとはどのようなことを考えることができるだろう。まずジッドの生きていた時代におけるスタンダールの出版と教育との関係について概観する。次に、ジッドの評論と日記からジッドがスタンダールをどう読んだかを分析する。

ジッドは出版に関わっていたためもあって多くの作家と親交があった。書評も多く、日記には読書や感想に関する記録が数多くある。ジッドの間テクニクス性に関する研究は少なくない。古くはドイツに限ったものから、ギリシャ古典劇との関係、さらにモンテーニュとの関係を論じたものなどがある<sup>4)</sup>。ジッドの書いたものには多くの作品が言及されており、ゲーテ、ニーチェ以外に系統だった影響をみるのは必ずしも容易ではない。フローベールが作家の模範としてマラルメとともにジッドの文学の形成に大きく関わったことは

1) André Malraux, *L'homme précaire*, Gallimard, folio, 2015.

2) 立川信子『『地の糧』の系譜の素描』愛媛大学法文学部論集人文科学編第33号 pp. 43-65, 2012年

3) Stendhal, *Œuvres complètes*, nouvelle édition: Slatkine Reprints, Genève-Paris, 1986; Librairie Honoré Champion. Paris. Réimpression de l'édition de Genève, 1967-1972.

Stendhal, *Œuvres intimes I, II*, Bibliothèque de la Pléiade, 1981

Stendhal, *Correspondance I, II, III*, Bibliothèque de la Pléiade, 1968.

4) Renée Lang, *André Gide et la pensée allemande*, L.U.F.Eglof, 1949.

Helen Watson-Williams, *André Gide and the Greek Myth. A Critical Study*, Oxford Clarendon Press, 1967

Hilary Hutchinson, *Théories et pratique de l'influence dans la vie et l'œuvre immoraliste de Gide*, Minard, 1997.

すでに論じた<sup>5)</sup>。スタンダールに関しては書簡や草稿などで散発的に意見を書いている。ここでは出版されて一般に読まれているジッドの日記と評論を対象を限る。

また、影響という現象はジッド自身が言っているように必ずしも直接的ではない。ある作品を読むことで何かを見つけるというよりは、作家自身が考えていることを明確にし、表現の手段を与えるという場合も少なくないからである<sup>6)</sup>。

## 1 後世にとってのスタンダール

ある作家が他の作家から受ける影響は、作家の受けた教育とかなり関わっていることが推測される。教育で模範とされた作品が少なくとも記憶に残っている可能性があるからである。しかし、学校で学ぶ文学と一般の読み物はいつの時代もかなり違っていたであろうことは想像される。

En 1894 et en 1909, Lanson dressait un double constat qui signale, en son temps, un double décalage: décalage entre les lectures faites au lycée, abandonnés ultérieurement, jamais reprises, et celles qui sont menées une fois terminées les études; décalage en ce tournant du siècle entre l'enseignement du français et les élèves. Ces réflexions de Lanson offrent un triple intérêt: elles parlent de malaise (l'article de 1909 a pour titre «La crise de l'enseignement du français»), elles évoquent le problème du point de vue des contenus, elles sont émises enfin peu de temps après les différentes réformes qui, de 1880 à 1902, restructurent le système scolaire, et mettent en cause la possibilité de ce réformes. Ainsi au tournant du

---

5) Nobuko Tatekawa «Les origines du classicisme d'André Gide –Autour de Gustave Flaubert», in *Études de langues et littérature françaises*, No. 76, 白水社、p. 2000, pp. 116-125.

6) André Gide, «De l'influence en littérature», *Essais critiques*, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 1999, p. 403-416. ECと略す。

siècle déjà, comme aujourd'hui, décalage, crise, interrogations<sup>7)</sup>.

また、学校で学ぶ文学も変化している。その代表的な例が19世紀の小説である。19世紀から20世紀にかけて学校教育が整備され、一般に普及していった。それは教育方法の確立を伴っている。文学教育に文学史が基本として取り込まれた時代である。模範としての古典もこの時代に大きく変化した。従来の古代ギリシャ語やラテン語教育とそれに伴う修辞学の教育の衰退に代わって、注釈 *commentaire* と論文作成 *dissertation* というフランス独特の教育方法が作り出されたことはよく知られている。この時期に小説が他のジャンルより文学の中で優位を占めるようになって行く。16世紀のラブレーの『ガルガンチア物語』や18世紀のルソーの『新エロイズ』のように古くから小説はあるが、作家と作品の数の上で19世紀から現在読まれている小説が圧倒的に増える。それは小説の読者の数がふえたことを意味している。模範となる作家も大きく変わった。19世紀後半、ジッドが教育を受けた時代には17世紀、18世紀の作家が大部分を占めていた。しかし、ジッドの後半生の20世紀初頭から徐々に19世紀の作家や詩人が中心を占めるようになる。スタンダール、バルザック、ユーゴー、フローベール、ボードレール、フランス文学として19世紀の作家が認知され、世界に知れた20世紀のプルースト、ヴァレリー、ジッド、マルローなどの作家が活動することになる。19世紀末にはスタンダールやフローベールやボードレールは教材の中ではほとんど取り上げられなかった。20世紀になるとそれらの作家が大きな位置を占めることになる<sup>8)</sup>。

Baudelaire était avec Stendhal la plus admirable intelligence critique de son époque. Que vaut le romantisme auprès de ces deux inventeurs ?

7) Martine Jey, *La littérature au lycée: invention d'une discipline, 1880-1925*, p. 6, Metz: Centre d'études linguistiques des textes et des discours, Université de Metz; Paris: diff. Klincksieck, 1998

8) Xavier Bourdenet, *Réalisme*, Gallimard, 2007

Xavier Bourdenet, Séminaire «Littérature et enseignement» (Martine Jey)/Université Paris-Sorbonne, séance du 27 mars 2015.

Or Stendhal, lui aussi, fut complètement méconnu par Brunetière (et aucun de ces deux grands noms ne figure dans le XIXe siècle de M. Faguet). (EC255 «Baudelaire et M. Faguet» 1910)

フローベールとボードレールは作品を出版した際、社会的良俗に反するとして訴訟になった作家であり、教科書にすぐには取り上げられなかったのも不思議ではない。スタンダールは大岡昇平の『武蔵野夫人』のように日本文学にも大きな影響を及ぼした小説家でもあるが<sup>9)</sup>、生前にはあまり評価されなかった。死後になって高い評価を受けるようになる芸術家は珍しくはない。画家としてはゴッホやモディリアニがよい例である。価値あるものが相応の評価を受けるまでにはしばしば長い時間が必要である。価値のないものの方がむしろ容易に受け入れられ流行することが多い。受容が容易であるからである。価値のあるものはそれまでの価値を変化させるものであるから、受容には時間がかかる。スタンダールは自分は後世に読まれる作家であり、「幸福な少数の人々 (happy few)」のために書いているのだと言っている<sup>10)</sup>。スタンダールの作品で同時代に知られたのは『赤と黒』と『パルムの僧院』で、生前に出版されているが、恋愛を結晶作用にたとえた『恋愛論』や自伝『エゴチストの回想』『アンリ・ブリュエールの生涯』など現在ではよく知られているその他の作品や手紙は以下の出版歴にみるように、死後、19世紀後半から20世紀初頭にかけて出版された。巨匠としてのスタンダールの姿は徐々に評価され、そびえ立つことになった。

*Vies de Haydn, Mozart et Métaastase* (初めの題名: *Lettres écrites de Vienne en Autriche, sur le célèbre compositeur Haydn, suivies d'une vie de Mozart, et*

---

9) 参考に日本の Amazon のベストセラーリスト、フランス文学では16位『赤と黒』(上) 37位『赤と黒』(下) 36位『パルムの僧院』(上)と二作入っている。1位『星の王子様』 6位『悪童日記』(映画2014年日本公開) 7位『異邦人』である。(閲覧2015年5月17日)

10) 『ルシアン・ルーヴェンス』の銘句 «to the happy few»

*des considérations sur Métastase et l'état présent de la musique en France et en Italie*), 1815

『イタリア絵画史』 *Histoire de la Peinture en Italie*, 1817

『イタリア紀行 ローマ、ナポリ、フィレンツェ』 *Rome, Naples et Florence*, 1817, 1827

『恋愛論』 *De l'amour*, 1822

『ラシーヌとシエクスピア』 *Racine et Shakespeare*, 1823

*Vie de Rossini*, 1823

『続ラシーヌとシエクスピア』 *Racine et Shakespeare, II*, 1825

*D'un nouveau complot contre les industriels*, 1825

『アルマンズ』 *Armanche. Quelques scènes d'un salon de Paris en 1827*, 1827

『ヴァニナ・ヴァニニ』 *Vanina Vanini*, 1829

『ローマ散歩』 *Promenades dans Rome*, 1829

『赤と黒』 *Le Rouge et le Noir*, 1830

『ある旅行者の手記』 *Mémoires d'un touriste*, 1838

『パルムの僧院』 *La Chartreuse de Parme*, 1839

『イタリア年代記』 *Chroniques italiennes: Vittoria Accoramboni*, 『チェンチ一族』 *Les Cenci, La Duchesse de Palliano*, 『カストロの尼』 *L'Abbesse de Castro, Trop de faveur tue, Suora Scolastica, San Francesco a Ripa, Vanina Vanini*, 1837-1839

*Idées italiennes sur quelques tableaux célèbres*, 1840

## 死後出版

手紙 *Correspondance* (1885) (édition 1927) tome 1 (1800-1805)

日記 *Journal* (1801-1814), 1888; (1801-1817); tome 1 (1801-1805),  
tome 2 (1805-1806), tome 3 (1806-1810), tome 4 (1810-1811),  
tome 5 (1811-1823)

*Filosofia nova*, 1931

劇作, 1931: *Les quiproquos, Le ménage à la mode, Zélinde et Lindor, Ulysse*,

Hamlet, Les deux hommes, Letellier, Brutus, Les médecins, La maison à deux portes, Il forestiere in Italia etc.

Molière, Shakespeare, la Comédie et le Rire, 1930

Écoles italiennes de peinture, 1932

Pages d'Italie, 1932

Les Tombeaux de Corneto, Mélanges de politique et d'histoire, 1933

Courrier anglais, 1935-1936

Mélanges d'art, 1867, 1932

Romans et nouvelles, 1854, 1928

『エゴチストの思い出』 *Souvenirs d'égotisme*, 1892, 1950

『リュシアン・ルーヴェン』 *Lucien Leuwen*, 未完 1894, 1926

『アンリ・ブリュラルの生涯』 *Vie de Henry Brulard*, 1890, 1949

『南フランス旅日記』 *Voyage dans le Midi de la France*, 1930

『ラミエル』 *Lamiel*, 未完, 1889

*Mélanges intimes et Marginalia*, 1936

*Le Rose et le Vert*, 1928

*Histoire d'Espagne: depuis la révolution du 28 avril 1699 jusqu'au testament du 2 octobre 1700*, 2007

*Vie de Napoléon*, 1969

*Privilèges*, Rivages Poche, «Petite Bibliothèque» n° 570, 2007

スタンダールに関してよく取り上げられるテーマは、スタンダール自身が自分を表現するために用いたエゴチスム *égotisme* やベイリスム *beylisme* という言葉で表せるものである。エゴチスムは自己分析する傾向と定義されている<sup>11)</sup>。

---

11) *Centre national de Ressources textuelles et lexicales*

大ロベール辞書 (1986) にも同様の定義がみられる。「Disposition de parler de soi, à faire des analyses détaillées de sa personnalité physique et morale」

Disposition de celui ou de celle qui fait constamment référence à soi en particulier dans le discours. Disposition de parler de soi, à faire des analyses détaillées de sa personnalité physique et morale

- Littéraire. [Terme utilisé par Stendhal (en parlant d'un écrivain)] Tendance à s'analyser, dans sa personne physique et morale ou par extension, à cultiver la forme d'expression que constitue le journal intime:

19世紀末から20世紀初めにかけて自然主義文学が盛んであった時期にも、エゴチスムという言葉は自己に対する問いを表すものとして使われるようになった。『自己礼拝』を書いて一世を風靡したバレスはスタンダールを自分の考えの源泉とし、さらに自己と土地の関係を強調するようになった。

Mais n'est-ce pas aussi que je la fatiguais par la monotonie de mes propos? Mon **égotisme** outre qu'il est peu séduisant, ne se renouvelle guère. (Barrès, *Un homme libre*, 1889, p. 209.)

ヴァレリーも同様にこの言葉を使っている。「エゴチスムを自己の役割を演じること、自然よりももう少し自然になること、そういう考えを持つわずかに前よりも少し自分であること」。

L'**égotisme littéraire** consiste finalement à jouer le rôle de *soi*; à se faire un peu plus *nature* que nature; un peu plus *soi* qu'on ne l'était quelques instants avant d'en avoir eu l'idée. Valéry, (*Variété II*, 1929, p. 96)

スタンダールが使ったベイリスム、またはスタンダール主義とは「個人主義、行動や情熱の追求に、時として皮肉な、精力の高揚」を意味している<sup>12)</sup>。

Attitude intellectuelle et morale, illustrée par les héros de Bayle-Stendhal, exaltant



l'individualisme et l'énergie parfois cynique dans la conduite de l'action et la recherche des passions. 同義語。(まれ) *stendhalisme*: [...]

従って、自己の発展という意味で、スタンダールは芸術理念としては、以前の時代の美学としての古典主義に対して自分の生きている時代の美学としてロマン主義を主張した。一般にロマン主義とは理性より感情、従って叙情性を重んじる。

しかし、ジッドは次のようにスタンダールについて言っている。スタンダールは批判的精神が強く、十分な叙情性はない。さらにロマン主義とは自分の話をするのではない。また、ユーゴーが客観的な描写においてさえ古典主義から遠いと同じく位、スタンダールは自分を語る時も、反ロマン主義である。

Mais on n'est pas encore prêt à revenir de cette erreur: d'associer l'idée de romantisme à celle de la confiance – comme si jamais en art importait le choix du sujet; comme si Montaigne ou Stendhal n'étaient pas aussi antiromantiques en se peignant eux-mêmes dans *Henri Brulard* ou dans les *Essais*, qu'un Hugo éloigné du

---

12) ジッドと親交のあったレオン・ブルム (1872-1942) はスタンダールの「幸福の実際的方法」の原理を「魂の深いエネルギーによる精神的陶醉」と説明している。「*«*Quand on a pris clairement conscience des exigences essentielles de sa nature, quand on a concentré vers ce but toute sa volonté agissante, quand on a rejeté résolument les faux principes de la morale courante ou de la religion, les fausses promesses de la société, le bonheur peut s'obtenir logiquement, par stades nécessaires, comme une démonstration mathématique. Dans cette démarche, on se heurtera à l'éternel ennemi: le monde, mais on sait le moyen de le combattre, c'est-à-dire de le tromper. Dès qu'une tactique appropriée nous a débarrassé de son emprise, le bonheur ne tient plus qu'à notre lucidité et à notre courage: il faut voir clair, et il faut oser. [...] Une mécanique du bonheur et non du plaisir, dans cette formule tient la nouveauté profonde. Stendhal part [...] des philosophies qui expliquent toute connaissance par les sens et réduisent toute réalité à la matière; mais il les couronne par une conception du bonheur où nul élément sensuel et matériel n'entre plus. Le bonheur, tel que Stendhal l'entend, dépasse de beaucoup la secousse heureuse des sens; il intéresse les énergies profondes de l'âme; il implique un élan, un risque, un don où la personne entière s'engage. [...] Il est un épanouissement, un moment d'oubli total et de conscience parfaite, une extase spirituelle où toute la médiocrité du réel s'abolit. Les états intenses de l'amour, la jouissance que procure l'œuvre d'art peuvent en fournir une idée.» Léon Blum, *Stendhal et le Beylisme*, Éditions Albin Michel, 1947, P131-133. (初版1914)

classicisme, fût-ce dans la plus «objective» de ses descriptions.

Que l'objet soit le monde extérieur ou soi-même, c'est l'attitude devant l'objet qui importe, la soumission du métier au modèle. (EC267 «Propositions» 1911)

## 2 ジッドにとってのスタンダール

ではジッドにとってスタンダールとはどういう意味を持っているのだろうか。まず、ジッドとスタンダールの関係を時間的にみると、ジッドの日記によると20歳頃までスタンダールを読んだことはない。スタンダールに関する日記の最初の記述は1889年で、これから知りたい作家として挙げている<sup>13)</sup>。

Ce Flaubert est grisant: à lire ses lettres, il me prend des rages énormes de voyager, d'éprouver des sensations nouvelles, inconnues, voir du pays et des choses, connaître d'autres langues, et surtout de lire. [...]

Je voudrais connaître Balzac, Dickens, Stendhal – et d'autres choses encore que je serais le seul à connaître, comme la façon de parler à ceux qui sont morts et que j'aime. (JI 59, 27 mars 1889)

[...] quand André Walter cherchait une auberge où pouvoir s'installer et écrire ses *Cahiers*. [...] Je ne connaissais pas encore Stendhal. (JII 13, 22 août 1926)<sup>14)</sup>

フローベールと異なって若い時から心酔した作家ではない。スタンダールの「乾いた」書き方を初めは好きになれなかった。しかし、その「勢い」には感嘆している。スタンダールのように「はやく書こう」としている。やがて特に

---

13) Gide André, *Journal I 1887-1925*, Gallimard, «Bibliothèque de la Pléiade», 1996. JIと略す。  
Gide, André, *Journal II 1926-1950*, Gallimard, «Bibliothèque de la Pléiade», 1996. JIIと略す。  
以下引用文中の下線は論文筆者による。

14) André Gide, *Les Cahiers d'André Walter*, L'Art indépendant, 1891.

自伝の「語り方」が好きになる。

Ainsi je raffole aujourd'hui de Stendhal; mais d'abord j'ai dû faire effort pour l'aimer. Il me paraissait sec; bien à tort. Mais, si j'avais à choisir dans l'œuvre de Stendhal, je crois bien que je préférerais à ses romans ses *Souvenirs d'égotisme*, sa *Correspondance* ou son *Henry Brulard*. Sa façon de le raconter, que lui même. (EC349 *Interview imaginaires VIII* 1941)

Le besoin d'écrire de Stendhal... Le besoin qui me fait écrire ces notes n'a rien de spontané, d'irrésistible. Je n'ai jamais pris de plaisir à *écrire vite*. C'est pourquoi je veux m'y forcer. (JI317, 10 janvier 1902)

Je me redis la phrase d'*Armance*: «Je parlai beaucoup mieux depuis que je commençais mes phrases sans savoir comment je les finirais.» (JI 802, juillet 1914)

Je relis ce matin le début du second cahier de mes *Mémoires*, pour tâcher de me remettre en train. Quelques passages anecdotiques me paraissent assez réussis; mais le plus souvent le ton languissant et berceur du récit m'est insupportable. Je n'admire rien que cette pétulance de Stendhal dans les lettres de lui que je reprends sitôt après, pour achever de me dégoûter de moi-même. (JI 981, décembre 1916)

Le grand secret de Stendhal, sa grande malice, c'est d'*écrire toute de suite*. Sa pensée émue reste aussi vive, et de couleur aussi fraîche que le papillon qui vient d'éclore et que le collectionneur a surprise au sortir de la chrysalide. De là, ce quelque chose d'alerte et de primesautier, de disconvenu, de subit et de nu qui nous ravit toujours à neuf dans son style. On dirait que sa pensée ne prend même pas le temps de se chausser pour courir. Ce devrait être de bon exemple; ou plutôt; son bon exemple, je devrais le suivre plus souvent. L'on est perdu quand on hésite. (JII 566 3 septembre 1937)

晩年にはそれをモンテスキューなどの集中した硬い文体と対比している。

Maintes façons de dire une chose; la forme la meilleure, le plus souvent, c'est celle qui vous vient à l'esprit du premier coup. C'est cette allure primesautière qui nous enchante chez Stendhal. Il semble toujours qu'on surprenne sa pensée au saut du lit, avant toilette. Mais il est d'autres façons de bien écrire. Je n'aime pas la pensée qui s'attife, mais bien celle qui se concentre et raidit; manière de Montesquieu, de Tacite. (JII 801, 1<sup>er</sup> février 1942)

スタンダールの好みにいつも共感できるわけではない。特にイタリアに対してあまり感動していない。

Ce soir visité énormité de Saint-Pierre. Je vois Rome à travers Stendhal, malgré moi. J'ai trouvé le secret de mon ennui dans Rome: je ne m'y trouve pas intéressant. (JI 213, Rome, *Feuilles de routes* 1895-1896)

小説はかなり早い時期から読み、晩年まで高い評価は変わっていない。1892年に『パルムの僧院』を読み、1913年に雑誌のアンケートで好きなフランスの小説10冊に入れている。

Le grand secret de cette diverse jeunesse, c'est que Stendhal, et particulièrement dans *La Chartreuse*, ne veut rien affirmer; le livre entier est écrit *pour le plaisir*.

[...] les tons ultraviolets lui échappent, [...]il se rattache un peu trop délibérément à lui-même (EC269-270 «Les dix romans français que...» 1913)

1925年には『赤と黒』の直接的な文体に感嘆している。

À côté de quoi *Le Rouge et le Noir* m'a paru magistral. Chaque phrase est tendue comme une corde d'arc; mais la flèche vole toujours dans le même sens, et vers un but toujours visible – ce qui permet d'autant mieux de voir qu'elle l'atteint. (JI1

282 1925)

しかし、この小説の表現の中に皮肉と「無味簡素さ」にわざとらしさを感じている。

Je crois bien me souvenir que Bourget, dans ses *Essais de psychologie* (qui m'ouvrirent l'entendement au temps de ma jeunesse), cite cette phrase du *Rouge et Noir*, dont il admire avec raison le raccourci: «Les enfants l'adoraient, lui [Julien] ne les aimait pas»-et je l'admirais avec lui. Aujourd'hui je l'admire encore; mais j'y sens trop de conscience, de complaisance dans le cynisme et quelque affectation de sécheresse. On sent trop qu'il se veut ainsi. (JII 851-852 décembre 1942)

スタンダールの日記を読むが、長い間は読み続けられない。本質に18世紀的なものを認めるが、違った形をしていると表現している。

Nul désir d'arriver à la fin de ce livre (le *Journal* de Stendhal). Je n'aime pas rester longtemps avec Beyle; mais je n'aime pas rester longtemps sans lui. Comme il m'eût irrité, parlant beaux-arts! Comme il m'eût irrité parlant femmes! et parlant lui-même encore plus... À dire vrai je suis heureux de ne le plus pouvoir connaître que par ses livres; mais combien mieux je le connais ainsi!

Encore quelque trente ans de recul il rentrera dans le XVIII<sup>e</sup> siècle, comme on voit en voyage une montagne isolée rentrer à mesure qu'on s'en éloigne dans la chaîne qui l'adosse et s'y confondre. Il est de même formation géologique. Mais tout différemment accidenté. Un mauvais écrivain traînerait plus loin cette image.

(JI 481-482, 19 septembre 1905)

晩年には、『パルムの僧院』をいつも読みたいわけではないと言っている。心理的に気取りすぎと批判しているが、『ルシアン・ルーヴェン』の方を高く

評価している。

«A.G. a confié à la *Virginia Quarterly Review* que, s'il se retirait dan une île déserte, il emporterait les livres suivants: *La Chartreuse de Parme*, *Les Liaisons dange-reuses*, *La Princesse de Clèves*, *Dominique*, *La Cousine Bette*, *Madame Bovary*, *Germinal*, *Marianne*.»

Je proteste: on m'avait demandé de designer mes dix romans français préférés. Si, exile, je ne pouvais emporter que dix livres, ce ne serait aucun de ceux-là. (JII 1029 novembre 1946)

*Lucien Leuwen* que je me proposais depuis longtemps de relire, me paraît supérieur à *La Chartreuse* et au *Rouge et Noir*, quand à son début tout au moins; car, les premières pages franchies (on ne peut plus engageantes), on se perd dans une broussaille de conventions (parce qu'il s'agit de les combattre; mais que ne les omet-on simplement, passant outré?). Embêtant comme du Marivaux.

«Il [Lucien] n'avait point assez de vanité pour que le dépit d'avoir peur lui donnât de ...» (p. 222)

Labyrinthe de préciosité psychologique. (JII 991 juin 1944)

次にジッドがスタンダールに指摘している特徴は次の三点に要約できる。

第一の点、批判精神と、いわば皮肉を特に評価している。第二次世界大戦頃にはそれはフランス文化の核とみなされている。

J'admire cette constance présence de l'esprit charmant de Stendhal. [...] cette égalité de l'esprit lui refuse les sublimes sursauts du lyrisme. (EC206, «Journal sans dates» janvier 1910)

Je parle de la critique non point comme d'un «genre», mais comme d'une qualité très rare, la plus indispensable pour toute réelle culture, où la France se montre

incomparable et qui se révélait naguère aussi bien dans les tragédie de Racine ou les poèmes de Baudelaire, que dans les *Caractères* de La Bruyère ou dans les romans de Stendhal. C'est bien aussi la critique, de nos jours, qui se trouve le plus en danger et, partant, c'est à nos qualités et vertus civiques qu'il importe de s'attacher et se rattacher le plus aujourd'hui – fût-ce en silence. (EC308 [Réponse à une enquête octobre 1940])

それは高い芸術性への志向につながる。高い価値がありながら、当時はまだ十分評価されていない作家の例としてボードレールとスタンダールがしばしば挙げられている。

Ce qui fait que le premier des renoncements à obtenir de soi, c'est celui d'étonner se contemporains. Baudelaire, Blake, Keats, Browning, Stendhal n'ont écrit que pour les générations à venir. (EC281, «Billet à Angèle» mars 1921)

[...] ce que nous cherchons dans nos maîtres ce n'est point le découragement. Si Stendhal et Baudelaire aujourd'hui se maintiennent très haut dans notre ciel, c'est que les rayons émanés de leur œuvre ont encore d'autres vertus que celles que leur reconnaissait Bourget. C'est à vrai dire que, de toute cette pléiade cite dans les *Essais de psychologie*, seule ils sont de parfaits artistes, et que seul l'art parfait reste à l'abri du vieillissement. (JI 1155 *Feuillets* 1921)

芸術性の特徴の一つとして、書かれている以上のことを意味しているように思えることである。つまり抑制された婉曲な表現ということである。

Faire sentir immanquablement qu'on pourrait en dire davantage; la plus belle part de l'art d'écrire est là. (JI 481-482, 19 septembre 1905)

また、誇張や曖昧さがなくことである。

Étrange article de Barrès, dans *Les Nouvelles littéraires*: «Salut à de jeunes écrivains». On y lit: «Aimez l'or, l'azur et la flamme» ...

J'ai en horreur cette façon d'écrire, cette façon de penser. Elle exaspérait à la fois et Stendhal et Flaubert. Cela sent le tenor et l'odalisque. Il n'y a là ni nerf, ni muscle; c'est flottant, vague et gonflé de vent comme un drapeau. (J1 227, 26 juillet 1923)

第二に、自己に関する強い関心と、そこから来る自伝や旅行記の創作である。もっとも好んでいるのは自伝『アンリ・ブリュラルの生涯』である。スタンダールの小説における現実主義的描写が作中人物の視点によっていることはすでに指摘されている。『パルムの僧院』のワーテルローの戦いがファブリスの視点から書かれていて戦況をとらえられない主人公をよく表現していることは文学の教科書に例としてよく引用される。ジッドはこの作中人物の視点を小説の中心テーマにしている。ジッドがマルタン・デュ・ガールとの書簡にも書いているが、ろうそくの光があたりを照らすように語り手の視点から作品を創作するという比喻はよく使われる。

恋愛における肉体と精神の二重性も自己分析に含まれるだろう。

Pour moi, je pense que Stendhal prenait à *la matière féminine* beaucoup plus d'intérêt que d'amour. Je le vois volontiers se prouvant, au bordel, qu'il n'est pas aussi impuissant que sa subtilité le fait paraître auprès des dames et des actrices. [...]

Il fait sentir plus beau son esprit que son corps; et, si j'eusse été femme, il me semble que nul ne m'eût moins plu à satisfaire, ni plus à berner, que Stendhal. Se refuser, c'était «lui tenir tête», ce faisant on avait de lui le meilleur. (J1 311-312, 5 janvier 1902)

具体的に、ジッドの『アルマンズ』について、恋愛とその現実的な成就の間のずれを分析している。スタンダールは特殊なケースから規則を帰納する。読者



の作者の意図の読み取りが必要である。ジッドの作品における読者の役割と共通している。

[...] L'intrigue ne joue pas seulement entre les personnages, mais surtout entre l'auteur et le lecteur. [...] il semble que Stendhal ait voulu nous montrer que l'amour le plus vif sera celui qu'insurgera la traverse la plus profonde. [...] l'un [Marivaux] procède du général et déduit, l'autre induit et, s'il cherche la règle, c'est en partant d'un cas unique, particulier jusqu'à l'anomalie. (EC544-555 «Préface à *Armance*» 1921)

第三の点は人生のあり方として、幸福の追求に関する強い関心である。ファブリスが塔の牢獄で感じる幸福もよく引用されるが、ジッドの作品にも幸福な時と場所を描く部分が少なくない。ジッドはスタンダールの幸福について関心が高いために、次のような書き間違いにも気をとめる。

Adrien Mithouard (1854-1919) son *Traité de l'Occident* (Mercure de France 1901) ou son *Tournement de l'unité* l'abondance des fausses citations [...] en croyant citer Stendhal: «L'amour est une promesse de bonheur», et ainsi de suite. [...]

Ô les Sources! Les *pures* sources! C'est tout de même là qu'il faudrait boire, et ne se laisser point désaltérer par d'autres eaux. (JI 597, le 18 mai 1908)

Stendhal a écrit: «la beauté n'est que la promesse du bonheur.» (*De l'amour*, Chapitre XVII) (JI Notes p.1541)

以上に挙げた点はエゴチスムやバイリスムで表されたものである。それはジッドが人間として、また作家として志向していた方向を示唆する指標になる。

### 3 スタンダールとジッドの小説

特に小説の概念について考えてみよう。スタンダールの小説には心理と社会の分析が総合されている。また、波乱万丈の主人公の活躍という興味を主体とした大衆小説の型と、よく練られた文体、何かの理念、たとえば社会描写や思想的な探求など文学的な価値の追求とをあわせ持っている。

鏡はジッドがよく用いる比喩であるが、小説の概念について考える上で、スタンダールの小説は社会を写す鏡であるという考えは出発点の一つであり、かつ批判の対象である。

Je trouve cette phrase que j'avais écrite pour *Urien*:

«Ils demandèrent au roman de remplacer les grands mouvements qu'ils n'avaient point faits; ils lui demandèrent de satisfaire tant bien que mal le désir vague d'héroïsme que leur imagination gardait et que leur corps ne réalisait point.»

Un roman, c'est un miroir qui voyage.

J'aime mieux cette formule que celle que Stendhal extrait je crois de Saint-Réal.  
(JI 169, août 1893)

ジッドが批判するのは現実主義と経験主義の混同されていることである。小説には構成が必要であり、偶然の小さな事実ではなく、めざすのはもっと高い現実主義、理念的現実主義ともいべきものである。ジッドの小説は社会の細々したことを模写するのではなく、社会の法則を抽出するような装置と考えられている。この考えで創作すると、鏡、すなわち自己という特殊な媒体の方が中心になって、虚構の想像が社会的な規模に発展するには主体に見えないもの、鏡に写らないものをどう考えるかという問題が出ている。主体の幻想が、客観的とみられる現実を創造することを制限してしまうからである。客観的な現実なるものは幻想であって、各主体の視点でしかとらえられないのである。

たぶんそう考えながらも小説を書く一つの方法がプルーストの小説と言えるだろう。小説は常に一人の私によって語られるが、語られるものはさまざまな人々、多様な芸術、社会事象である。プルーストの小説は語り手がどうして知り得たのだろうかと思われることも語っている。

Je ne parvins jamais à me persuader tout à fait de l'existence réelle de certaines choses. Il me semble toujours qu'elles n'existent plus quand je n'y pense plus; ou tout au moins qu'elles se soucient plus de moi quand je ne me soucie plus d'elles.  
Le monde m'est un miroir, et je suis étonné quand il me reflète mal.

[...]

Il faut cesser de souffler mon orgueil (dans ce cahier) pour faire comme Stendhal. L'esprit d'imitation; m'en défier beaucoup. Il ne faut pas faire une chose parce qu'un autre l'a faire. C'est la morale des grands qu'il faut retenir et dégager des faits contingents de leur vie; non les petits faits qu'il faut imiter.

Oser être soi. Il faut le souligner aussi dans sa tête. (JI 131, 13 juin 1891)

ジッドもまた『法王庁の抜け穴』（1914年）を書こうとしていた時期からそれまでの語り手の視点に限定された小説ではなく、社会を描くような小説を描こうとしたと推測される。そのためにジッドがスタンダールの小説をその頃読み返していたのであろう。

Avant d'écrire le premier mot de ma phrase, j'attends qu'elle soit toute formée dans ma tête; déplorable; plutôt l'incorrection. Besoin de relire du Stendhal. Oser écrire sans ordre. (19 mai 1913)

D'abord achever mon livre. Repousser tout ce qui m'en distrait. (21 mai)

Achévé hier *Les Caves*. (24 juin) (JI 744-745)

また、このジッドの小説が聖職者のふりをした人間による詐欺事件から発

想されたことにもよっているのだろう。『赤と黒』、『パルムの僧院』にしてもジュリアンの偽善や聖職者の欺瞞は中心的なテーマである。それはジッドの自己欺瞞のテーマと重なりながらも、さらに社会性の強いものである。ジッドが小説の可能性を広げようとした時、読み直したいモデルとして浮かんだと考えられる。

しかし、ラフカディオはジュリアンともファブリスとも異なっている。ジッドの作中人物はスタンダールの作中人物のように出世を求めることも、恋をすることもなく、さまよい歩く。そして一見因果関係のない殺人を犯す。ジッドの小説は信じるものも目的も見失ったある世代を写している。

またスタンダールは小説と自伝を分離して創作している。ジュリアンやファブリスはスタンダールの想像上の分身ではあっても、あくまでも虚構で自伝とは異なっている。その想像力の大きさはジッドをはるかにしのいでいる。スタンダールの「勢い」という言葉でジッドが言おうとしたことだろう。

結局、視点による視野の制限の問題は常にジッドの小説から離れなかった。むしろ視点の違いによる現実から作り出される物語の違いがテーマと感じられる。ドストエフスキーはそういう観点で小説を考える機会となった。ドストエフスキーに関する論ではスタンダールの作品の視点が一定方向であることを批判している。

[...] phrase qui pourrait bien paraître stupide si Stendhal ne s'en était pas empire pour abriter son esthétique: «Un roman, c'est un miroir qu'on promène le long d'un chemin.» Certes, il y a en France et en Angleterre quantité de romans qui relevant de cette formule: [...] Mais rien n'est plus éloigné de cette formule qu'un roman de Dostoïevski. Il y a entre un roman de Dostoïevski et les romans de ceux que je citais, et les romans de Tolstoï ou de Stendhal, [...] Dostoïevski compose un tableau où ce qui importe surtout et d'abord, c'est la répartition de la lumière. Elle émane d'un seul foyer... Dans un roman de Stendhal, de Tolstoï, la lumière est constante, égale, diffuse. (EC598 «Dostoïevski III» 1923)

ジッド自身が自分で唯一の「小説（ロマン）」と読んだ作品『贖金使い』を書いた後、『カストロの尼』などを読み、スタンダールの素晴らしさを再確認している<sup>15)</sup>。スタンダールの文学をジッドは「研ぎ澄ますためのイカ」にたとえている。

*Correspondance de Stendhal.*

Stendhal n'a jamais été pour moi une nourriture; mais j'y reviens toujours. C'est mon os de seiche; j'y aiguise mon bec. (JI 581 8décembre 1907)

晩年になるにつれて、スタンダールにより批判的になっている。最後に書かれた評論では、スタンダールの作品に決定的に欠けているものは、宗教的な感情の領域である、恍惚、陶醉、ゲーテの言う「戦慄」である。

Je dirai plus: il est certaines strates de l'âme, où Stendhal ne cherche pas à pénétrer parce qu'il les ignore; celles, profondes, où s'installeraient les sentiments religieux dont Stendhal a fait bon marché; où règnent et s'amplifient le grand Schaudern goethien (mot pour lequel je ne trouve aucun équivalent parfait dans notre langue), les trances et les enchantements. Il se peut que ces régions mystérieuses n'existent que dans l'imagination des hommes, ne soient que constructions et substructions de l'esprit; mais elles importent tout de même et, privé d'elles, l'être humain est tout appauvri. [...] mais voici que Stendhal soudain nous fait sentir et comprendre, sans le vouloir, le vide affreux de leur absence. (EC805-818 «En relisant *Lamie*» 1947)

未完に終わった『ラミエル』の批評であるから、スタンダールとしては十分な展開をしている作品ではないが、これはジッドのスタンダール全体についての

15) «*L'Abbesse de Castro*; excellent» (JI 1281, mars 1925)

«Achévé *L'Abbesse de Castro*. Excellent.» (JI 282, 18 avril 1925)

批評といえることができるだろう。理性による分析と叙情性を抑えた表現では表現できないもの、たぶんスタンダールが感じることでできなかったものがあると考えている。あるいは、戦慄や恐怖を伴う感動は古典的な崇高であって、スタンダールのめざしたのは近代の「やさしい崇高」であるといえることができる。それを「心やわらぐ、心ほぐれる、すべてを捨ててほっとする瞬間」と鈴木昭一郎は説明している<sup>16)</sup>。

ジッドにとっては古典的な美学はロマン主義と複合した現代的な概念であり、常に存在しているといえるだろう。

自伝という分野を豊かに開拓し、小説の虚構性と作中人物の主観を大きく発展させる中で神秘的なものと無縁のスタンダールの文学は、熱心なプロテスタントとして育ちその信仰と厳格なモラルからすこしずつ離れて行ったジッドにとって、感嘆の対象でありながらも、何か欠けたものを感じさせる存在だったのであろう。ブルムはスタンダールが愛や幸福についての見解や個人的孤独の意識についてはロマン主義であるが、純粋なロマン主義者にとってすべてであるものはスタンダールにとって一部しかないと言っている。特に欠けているのは「あらゆる形の宗教性」。「疑いも信仰もない。神的理想に対する渴望や道徳的不安も全くない<sup>17)</sup>。」同じ世界的変動を物理的にも精神的にも経験した世代の共通する見方と言える<sup>18)</sup>。

スタンダールの真価が理解されるには、スタンダールの言った通り長い時間が必要だった。理解される過程においてもバレスのように自分なりの解釈の中

16) 鈴木昭一郎『スタンダール』、清水書院、1991年、pp. 62-74。

17) *op. cit* pp. 186-197。

18) ピエール・ラシャスはジッドとブルムのスタンダールに対する考えに違いを見ている。ジッドは文学の創作という美学を中心にしているのに対して、ブルムは幸福への方法、社会生活への対処法というモラルを中心にしていると考えている。(André Gide, Léon Blum, *Correspondance 1890-1950, nouvelle édition augmentée de 29 lettres inédites, établie, présentée et annotée par Pierre Lachasse*, Presses universitaires de Lyon, 2011, pp. 152-154) しかし、ジッドはブルムほど類型化していないが、根底には類似した関心と見方を見ることができる。

に入れていく読者は少なくない。個人と郷土の関係を不可欠のものと考えたバレスと対立して、個人は郷土を離れてはじめて成長できると主張した<sup>19)</sup>、ジッドにとって個人の視点は作品創造と切り離すことができないものであった。スタンダールの創造はそういう観点からは主観的に不十分なものを感じられたのだろう。しかし、逆にそれはジッドの文学として虚構性の限界につながっていくことになったのかもしれない。

ブルムによると、分析的ロマン主義であるベイリスムの理解は社会状態によっている。1850年のスタンダール愛好者は理性に特に執着し、ロマン主義の内面を顧慮しなかった。1885年のスタンダール愛好者は逆に個人的な意味を強調し、論理的内容を軽視した。ベイリスムとは内省の方法と心理的分裂であった。実際的成功と征服に向けられた。スタンダールの幸福の概念は利害を離れたものであったが。そして、1895年以降は読書や内省よりも行動への好みが多まる。1914年の頃には両面が評価される。すなわち、ベイリスムは科学的ロマン主義的なもの、すなわち論理的で、いわば情熱的なものと見られる<sup>20)</sup>。

ジッドはスタンダールの論理性も内省も常に評価しているが、内省の方により興味を持っていて、叙情性の制限が人為的だと感じている。ブルムの言う1885年の読者の特徴は見られるが、自分の文学に期待するものにスタンダールが十分には答えられないものを感じられるようになっていく。

文学とは作者だけではなく、読者によっても作られていくことはすでに読者の研究によって言われてきた<sup>21)</sup>。それぞれの時代の考えを啓発しながらより豊かになっていくものである。十分に内容を理解ない若者の読書と感動は、研究によって豊かになった読解や人生の経験を経た老年の読書に劣らず、意味を持っているように、各世代の読書もまたそれぞれの意味を持っている。後世にしか理解されないことを予告したスタンダールの例はある典型を示している

19) Peter Schnyder, «Gide face à Barrès» *Orbis Litterarum* 1985, 40, pp. 33-43.

20) *Op. cit.* pp. 222-245.

21) アントワーズ・コンパニオン（中地義和・吉川一義訳）『文学をめぐる理論と常識』岩波書店、2007年、pp. 157-188; Antoine Compagnon, *Le Démon de la théorie, littérature et sens commun*, Seuil, 1998.

が、数多い文学作品を生み出し、また外国文学が急速に流れ込んでいた19世紀末から20世紀半ばのフランスの例を研究すれば、読書とそれによる世界観の形成をさらに考えることができるだろう。